

# 科学技術世界のなかの生態民俗誌に向けて

## －琵琶湖産コアユの資源化と流通を事例に－

加藤 秀雄(滋賀県立琵琶湖博物館)

ドイツの民俗学者であるヘルマン・バウジンガーは、『科学技術世界のなかの民俗文化』(1961)において、「民俗世界と科学技術世界をたんなる対立関係としてとらえる考えかたを克服する」ことの必要性を訴え、「自然なものとしての科学技術」という観点を示した[バウジンガー 2001(1961):22, 42]。本書は、今から半世紀以上前に刊行された著作だが、現在の私たちの暮らしを顧みる時、このバウジンガーの観点は有効性を失っておらず、むしろその重要性は、ますます増しているといえよう。「自然なものとしての科学技術」は、私たちの身の回りにあふれており、人間の社会生活において、これと無縁の領域を探ることの方が難しい。このような状況を背景とし、「科学技術の民俗学」の必要性は、近年、日本でも指摘されているが[近藤 2018:110-111]、具体的な調査や研究の蓄積が、今後、どれだけ進むかは未知数である。

そこで本発表では、「自然なものとしての科学技術」に取り巻かれた民俗学のフィールドを、どのようにして描けばよいかという問いを立て、琵琶湖の「コアユ」と人、科学技術の関係を事例としながら、この問題について考えてみたい。

コアユは「湖産アユ」とも呼ばれ、通常のアユ(オオアユ)よりも、かなり小ぶりである。近代以前には、コアユとオオアユは別の魚であると思われており、その資源的価値も高くなかった。しかし、20世紀初頭に両者は同一種であることが確認され、コアユを琵琶湖以外の環境に移植するとオオアユに成長することが実証された。これ以降、琵琶湖の周辺地域のみで消費されていたコアユは、放流・養殖用資源としての価値を持つことになる。琵琶湖産アユ種苗(湖産アユ)は、1930年代以降、全国の河川組合や養殖業者に出荷されるようになり、最盛期の1990年代初頭には全国で流通するアユ種苗のうち、尾数の70～80%、重量の90%が琵琶湖産のものであった。このコアユの資源化と流通網の拡大は、琵琶湖における漁業の生産構造に大きな変化をもたらしたが、それを促したのは、大学の研究者や行政のテクノクラートによる科学的実験である。このような実験によって得られた知見や技術が、生活の場にもたらされた時、「自然なものとしての科学技術」という観点が活きることになるだろう。本発表では、琵琶湖における人とコアユの關係に、科学がどのようなインパクトをもたらしたのかということを中心に見ていきながら、それを「科学技術世界のなかの生態民俗誌」として描き出すために、どのような視点が必要かを論じる。

### 参考文献

- ・近藤社秋 2018「現代の民俗学」『Lexicon 現代人類学』以文社
- ・バウジンガー、ヘルマン 2001(1961)『科学技術世界のなかの民俗文化』、河野眞 訳、愛知大学国際コミュニケーション学会